

立命館宇治中学校・高等学校

二言語による卓越した読解力・思考力の養成

2010年4月、IB教育の開始で日本の教育に新風を

高校教頭 岩崎 成寿

なぜ今 IB 教育なのか

前号でもご紹介したとおり、立命館宇治高等学校は2010年4月から国際バカロレア（IB）ディプロマ・プログラム（DP）の正式な実施校となりました。なぜ、今、IB教育を始めるのか。それは、IBが世界で最も先進的な教育プログラムであり、かつ日本の教育を変える起爆剤でもあるからです。

2000年以降、3年毎に実施されたPISA（ピザ。OECDによる国際的な学習到達度調査。義務教育終了段階の15歳が対象）において日本は回を追う毎に国際順位を下げ、「PISAショック」と呼ばれました。特に読解力の低下が2000年8位から2006年15位と著しく、その間1位・2位を争うフィンランドや韓国に大きく水をあけられる形となりました。PISAの設問は、単に知識の量を問うのではなく、与えられた情報を分析し自分なりの答えを導き出すことが求められました。いわば「答えのない問いに答えを出す」傾向の設問でした。日本の子どもの問題点は、単に平均点が低かったことにとどまらず、無答率の高さが他国に比べて群を抜いて高いことでした。論述式になると、全くお手上げであったのです。

このように、PISAは「日本の教科教育はこのままでよいのか」と問題提起しました。この結果を深刻に受け止めた文部科学省は、「全国学力・学習状況調査」において、従来の「知識」に関する問題とPISAを意識した「活用」問題を出題し、新学習指導要領でのPISA対応をすすめています。しかし、現在の「知識蓄積」型受験体制が続く限り、小手先の対応に終わる可能性が高いでしょう。なぜなら、両者は学力観を異にするからです。日本の教育が「知識蓄積」型であるとするれば、欧米の伝統的な学力観を背景に持つPISAの設問は「思考発信」型と言えます。

こうして、ここ数年PISAが日本の教育界を席捲してきましたが、実は40年以上前から同様の学力観に基づく教育プログラムが誕生していたのです。それが国際バカロレア（IB）なのです。IBは現在、138カ国、2,823校、778,000人が学ぶ教育プログラムへと発展しています（2010年2月現在、公式HP）。

国語と IB Japanese はどう違うのか

では、IB教育と日本の教育との違いを具体的に見ていきましょう。例として、日本の「国語」とDPの「Japanese（第一言語）」を比較してみます。DPでは全科目の約85%を共通言語として英語（またはフランス語・スペイン語）を用いますが、「第一言語」では母国語で文学を履修するので科目名は「Japanese」です（自国文化を尊重するIB精神の具現化と言えます）。両者を比較すると、違いは歴然としています。

第一に、試験問題の形式が全く違います。大学入試センター試験を筆頭に、日本における国語の試験問題は「マークシート」方式、あるいは選択肢問題が主流となっています。例えば、「傍線部D『障子をおえて襖に手をかけたとき彼は不意に空しさを覚えた』とあるが、なぜ『彼』は空しさを覚えたのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。」（平成21年度大学入試センター試験問題「国語」）と問い、五つの選択肢から正解を一つ選ぶという形式です。選択肢は30～50字前後の文で構成され、大方が正解の文の一部に不正解の要素を紛れ込ませた選択肢によって「惑わせる」ケースがほとんどです。まさに「間違い探し」です。

一方、DP Japaneseの試験問題はどのようなものでしょうか。

「題名は作品の主題を導く」と言われますが、あなたが学習した作品（二つ以上）の中から例をあげて比較し、題名がどのような展開を作品に与えているかについて論じなさい。



第1回 IB Japanese Fair にて